



九月夜話

3039
1



213
 3039
 1-10
 3039
 1
 特

半月夜話自序



月夜ある人々見えたりいふに花は
 春の来ぬやうな色に染みかへて又さ
 らにやうな色になると知る活葉ふらふ
 何と云へば世の羈りにはあづけてい
 のこさうして其の心をなやまして
 去月あるや。阿波乃神はめどこや
 花をさす。ゆきゆきと大津乃
 やどきるま。同一月に來の八日はあ

昭和九年
 七月二三日
 晴

文ブミのまゝにふととてふとやのせう。そをるるれ
づりカキをちつてふととてふとや。痴人チビ西メシの
差ユメを説トカバびしとてふとや。その後ハタを肥コヤさし
貌バクてふけのふととてふとや。その後ハタを肥コヤさし
路シ人の維コシ時トキ文政ブンセイ十一オウ戌シ子シれや
お月シエもあつた。江戸人エドビト白ハク氏トウ子シ恨ナニ花ハ
能シやどりふとてふとや。その後ハタを肥コヤさし

蟬丸傳記考證

蟬丸の名ハ謡曲ハ出る所也古くより言ひて傳と雖正史又載ざる
 故其事跡究て審るるに原百人一首のこれやとの歌ハ後撰集
 旅之部一ハおさむる怨みて其詞書ハ往く人を見てとあるなりて盲目は
 おらばといひ或ハ盲目ととも見てといふ事とぞあると是等の説契沖
 師とて也諸先哲往々論らひ多ひて莫古されり再爰ハ贅せし然れと暫
 く童蒙の爲ハ本朝通記の文を左ハ抄出さんと同書前編二十延喜五年の
 條ハ曰今歲蟬丸住相坂山と傳曰蟬丸不詳其姓氏善彈琵琶
 且好詠哥蟬丸初事式部卿敦實親王親王子王最精管絃
 於琵琶特妙自愛流泉啄木曲不肯傳之人問其曲自傳既

去結庵於所々隱地幽栖矣是歲又歸州廬於會坂關焉
食於往來人而時々絃歌樂焉平素所弄之琵琶號曰
蟬丸頭童而形類僧時人稱為道人一為仙先是三位傳雅
聞慣熟蟬丸之和琴就草廬學之久得或云相坂明神乃
蟬翁也

按世傳蟬丸延喜帝第四皇子也故隱栖近畔有四宮
河原之名此說非也夫按國史帝春秋今歲僅二十二
豈有事敦實而後去求幽居之皇子乎以時代非正
說可知矣或又曰蟬丸目盲遁世時々弄琵琶樂焉
者弄琵琶始於此故後世藝家推稱琵琶神然咏哥

序曰蟬丸在會坂關見往來人非盲人又可知焉云
と云々。尚追而考ふ事。

文政十二年己丑孟春中浣

白頭子柳魚再識



蟬丸傳記卷之五

是哉此行
茂還毛別
天者知茂
知羅奴毛
逢阪西關



傳記

平月

竹花話

第二回

軒並

紀念種

第三回

程雲井雨霜婦

第四回

邊邑乃鳥

第五回

徑溪靈天蓋

第六回

田舎渡の絹商

第七回

崎路の霜

第八回

伽女乃僻氷人

第九回

步欄の修羅の岐

第十回

太上天皇の賽使



通計拾回目錄畢





床物語村老女

蓮の姫

蟬丸言号
一夜



蟬丸傳記

半月夜話卷之壹

江戸

白頭子柳魚編次

第壹回 竹園紀念種

人皇五十九代宇多天皇第二の皇子敦仁親皇の御母を藤原の胤
子と申し中納言高藤公の御女なり此君ハ唐土の堯舜も増て聖
德祭く渡らせり又寛平五年竟る東宮ニ幸せり則醍醐帝
是年延喜天曆の御代と後の世迄も聖代の例引け皇子の御元
アタリに愛ふ式部卿敦實親皇と申ハ宇多帝第一の皇子とて
親皇の兄ふりよせど心荒く猛業をのぞ好まされければ
此皇子ハ親しきより者る其勢ハ幾隔の遠ひある程は親皇

深く悲しを發し。父帝と瘞し。一天之位と奪んと。不良の臣企あつて。味方々集り。仁和寺におゐて。私軍議の評定をうゝ。あひるを方。れ。実を隠し。顯るゝ。い。あ。と。中。い。ち。早。も。此。緯。大。内。不。漏。々。一。つ。み。帝。深。く。逆。鱗。す。く。徑。又。良。岑。の。宗。貞。三。位。博。雅。の。兩。個。と。大。お。と。あ。て。不。日。大。軍。を。卒。し。攻。討。す。ゆ。づ。り。敦。實。親。皇。を。組。せ。黨。の。密。一。時。の。利。慾。の。と。聚。る。野。武。士。山。客。の。類。す。て。果。敢。々。し。き。者。の。あ。い。さ。う。々。れ。バ。企。年。あ。ら。う。て。朝。庭。の。一。誅。伐。の。沙。汰。さ。う。と。さ。う。と。齊。く。誰。一。人。討。手。あ。ら。う。け。錯。矢。の。一。筋。あ。ら。う。と。も。射。返。さ。ん。と。さ。る。者。あ。ら。ん。や。吾。先。の。と。軍。用。金。を。掠。り。取。夜。半。の。終。り。て。食。散。く。不。慮。う。せ。な。れ。バ。敦。實。親。皇。の。無。念。骨。髓。ま。て。つ。い。奈。何。い。せん。と。齒。く。り。あ。ら。う。て。あ。ら。う。

や。る。適。宗。貞。博。雅。の。大。軍。を。引。率。し。て。仁。和。寺。に。押。寄。鯨。波。を。吐。と。揚。て。責。め。て。な。れ。バ。親。皇。今。の。詮。方。を。此。の。え。の。潔。く。腹。を。切。て。果。を。其。准。備。を。ぞ。か。ま。ひ。ぬ。茲。は。親。皇。の。年。未。愛。さ。せ。あ。る。童。は。王。丸。と。い。ふ。者。あり。今。歳。十。六。才。あ。り。て。実。は。王。と。い。ふ。名。を。負。て。その。容。色。美。玉。の。如。く。宋。王。の。童。形。在。五。中。ね。が。総。角。の。髪。斯。や。と。送。く。女。子。あ。ら。う。て。ん。や。が。た。姿。の。此。童。容。姿。の。閑。雅。さ。る。も。似。と。其。性。質。雄。々。と。文。明。ら。う。武。は。圖。る。に。あ。ら。う。吳。子。胥。の。鼎。を。あ。げ。楚。王。が。山。を。拔。く。脅。力。あ。ら。う。特。は。忠。義。の。志。深。く。斯。れ。親。皇。渠。と。愛。さ。せ。あ。る。事。太。く。あ。ら。う。二。る。と。者。と。憐。れ。と。あ。ら。う。渠。原。の。河。内。國。一。村。村。ら。の。所。の。壯。客。の。子。あ。ら。う。幼。稚。ら。う。東。作。の。業。如。嬌。ひ。獨。都。の。登。り。知。己。を。覓。て。親。皇。王。符。給。仕。

○ついに枕席のそとに穢みあるものなり。今日に至りては尚傍を
放れど君生害しむるに至るが殉死をあるを顔く面色あるふ
皇の玉丸を近く召れ汝の年来朕は事あると正首はてまうも王位
の才あり朕尙本意をとげ連れ萬乗の位につくが汝を大臣に
て義機の政事を執せむやと思ひことをも頼めりて隠謀する
らばて速く頭れけ期はるごと如何も詮方あり汝はいふ人
み面をえ隠れざるこそ幸ひ奈何もして生延る吾志は終つ
つと謀叛を起し吾等憤を晴しれんは千僧供養をせしめ
まうも死するなどの事を思ひとせり大に企てられは然らん
吾魂魄は影身付添大に成就とせり。と怒れる眼は血に

そとに涙を流してのこり玉丸も涙をとりひかぬ吾等
大義の企て東あることこれ後匹夫下種の種あるも奇く神の
は未だれ時運はるが大に成就せり。古人の語も芳を而世
は流とこと何ぞ臭い。年々傳ふとやん緯あるにて誅せ
られ尸外桶はさるごとく大丈夫なる者何ぞ辱として生涯を結果
んや。心易うれ吾君といふ勇ましくゆめつるふ親皇は喜び
らば微妙なるうらなひつまで其志を翻るは吾修羅の志執を
くじられは汝其心あるんを譲る物あるあれとて錦の体入
る一面の琵琶をとめて玉丸を示して曰。此琵琶は玄上と号す
仁明帝の永和年中掃部頭藤原貞敏入唐して劉二郎と

り者^{もの}は後^{あと}に流^{なが}泉^{いづみ}啄^{つく}本^{もと}の秘^ひ曲^{きょく}を習^{まな}ひけ。帰^{かへ}朝^{あさ}のとき^{とき}琵琶^{ひば}二面^{ふためん}を^を帰^{かへ}る。これ本^{もと}朝^{あさ}琵琶^{ひば}の始^{はじ}め。其^{その}一^{ひと}を牧^{まか}馬^{うま}と号^{なづ}す。一^{ひと}と玄^{けん}上^{じやう}といふ。則^{すなは}ち其^{その}琵琶^{ひば}是^{こゝ}に。此^{こゝ}琵琶^{ひば}ハ軀^{こゝ}といひ声^{こゝ}といひ古^こ今^{いま}未^い曽^そ有^ある物^{もの}ありて其^{その}靈^{れい}驗^{げん}ハ内^{うち}裡^り焼^や亡^つの折^{をり}。自^{みづか}と指^さ出^でて。撥^{はく}面^{めん}あり。文^{ぶん}消^{しょう}失^{しつ}て所^{ところ}に赤^{せき}色^{しき}ハあらず。先^{せん}年^{ねん}故^こありては琵琶^{ひば}と俱^{とも}に彼^か流^{なが}泉^{いづみ}啄^{つく}本^{もと}の曲^{きょく}も或^{ある}人^{ひと}より學^{まな}ひて吾^{われ}も之^{これ}を彈^ひせり。然^{しか}れど吾^{われ}今^{いま}黃^{わう}泉^{いづみ}は赴^{おもむ}き世^よにこれを知^しる人^{ひと}なく。琵琶^{ひば}と俱^{とも}に秘^ひ曲^{きょく}も絶^{こと}えん。その口^{くち}惜^しし。これハ現^{げん}世^よの思^{おも}ひで。今^{いま}汝^{なんぢ}は諱^{かたが}る。あり。元^{もと}琵琶^{ひば}といふ今^{いま}の中華^{ちゅうか}魏^ぎの武^ぶ帝^{てい}は始^{はじ}り長^{なが}三^{さん}尺^{ふく}五^ご寸^{すん}ハ三^{さん}才^{さい}五^ご行^{ぎやう}と象^{さう}の弦^{げん}四^し筋^{しん}ハ四^し季^きと象^{さう}と或^{ある}人^{ひと}

鳥^う孫^{そん}公^{こう}主^{しゅ}の造^{つく}りて馬^ば上^{じやう}に彈^ひせり。始^{はじ}る。その口^{くち}惜^しし。然^{しか}れど漢^{かん}の武^ぶ帝^{てい}の時^{とき}ハ原^{げん}来^{らい}華^か夏^かの曲^{きょく}ハあらず。西^{せい}域^いより出^いづ。言^いひ。辟^{へき}葉^{えつ}國^{こく}より獻^{けん}ず。物^{もの}とも。右^{みぎ}すれ。左^{ひだり}すれ。汝^{なんぢ}ハ生^{なま}平^{へい}は吾^{われ}傍^{そば}に在^ある。粗^{あら}音^{おん}律^{りつ}の道^{みち}も嗜^{しやう}む。後^{のち}又^{また}人^{ひと}ハ撰^{せん}ず。傳^{でん}へる。秘^ひ曲^{きょく}名^な麗^{れい}永^{えい}く吾^{われ}邦^{はう}の物^{もの}とある。縦^{たて}歌^かハちかく寄^よせり。吾^{われ}秘^ひ曲^{きょく}ハ彈^ひし。居^ゐる。彼^か孔^{こう}明^{めい}ハ街^{まち}亭^{てい}ハ破^やれ。櫓^ろも櫓^ろも登^{のぼ}りて琴^{こと}を調^{てう}へ。有^あ繫^{けい}の仲^{ちゆう}達^{たつ}ハ諸^{しよ}葛^かハ計^{けい}畧^{りやく}の有^あらん。恐^{おそ}れて責^{せめ}む。如^{ごと}く宗^{そう}貞^{てい}博^{はく}雅^や們^{もん}も却^{かへ}り。己^{おの}が智^ち又^{また}惑^{まど}て。左^{ひだり}右^{みぎ}ある。責^{せめ}む。登^{のぼ}りて琴^{こと}を調^{てう}へ。有^あ繫^{けい}の仲^{ちゆう}達^{たつ}ハ諸^{しよ}葛^かハ計^{けい}畧^{りやく}の有^あらん。恐^{おそ}れて責^{せめ}む。如^{ごと}く宗^{そう}貞^{てい}博^{はく}雅^や們^{もん}も却^{かへ}り。己^{おの}が智^ち又^{また}惑^{まど}て。左^{ひだり}右^{みぎ}ある。玉^{たま}丸^{まる}ハ傳^{でん}へ。上^{うへ}ハ。事^{こと}更^{さら}み。吾^{われ}死^し後^{のち}もて亡^な骸^{がい}と



あつゝも、解の敵の手一渡りさうしう計らへど、諄々大議乃企
怠るべし遺言もこれ限と腹づきと突立のふろを玉丸を
今、徐方あつゝも、首を討ててさうしう袖曳ちさう推包みさ
腰より着内無念残りし白刃を拿て推拭ひ刀室に納めてさ
むさゝち亡骸とが穴さうちて深く埋め四面は火放ちしに念
の琵琶を背負ひ庭前の松が枝を傳へ、堀河乗越人あさ
方は、逃れりて首とさうしうて後辺をえさうしうおちりも風烈く
く猛火盛よりあがりて餘烟天知焦を光景は今の心易し
敵乱入とも亡骸と見るふりさうしう我、城さ土民と産れる
が竹の園生み給仕さうしうとさうしう。おけちさうしう不刺一内、祠乃

傳さけごととけいせも稀ある名器さうしうとさうしう。知る人あさ
秘曲を傳へるは恩、須弥もひささ蒼海も却て浅、最
早なつゝも父母のあけれど、襦袢より言号の妻あれど是を顧
るふりさうしう。大切の細瑾さうしうとさうしうと親皇の恩思は比るに
世の羈も何りのうら、今より名を喪れと隠し、何れのはあも所を
滞り時を俟こそ肝要あれさうしうと吾は問、吾は答て音
單身、那里ともさうしう落失さうしう。然るふとさうしう討手の大お宗、自持雅
の、兩個の仁和寺小押寄豆麻竹葦と取るとさうしう。鯨波さうしうと
揚るといへる寺中さうしうさうしうさうしうて声、合さる者もさうしう
琵琶を弾むる音、父やふさうしうと兩個の定めて計畧あつゝと雲

時猶豫うちは奥の方より俄頃火の入りけるに駭き急ぎ士卒
と下知して燭の中をひたして探し見るといふも更には人殺
さるる。然れど又逃れ出でる方もあるれば詮方なく。一ヶ月
凱歌を唱へて軍勢を元朝庭に立歸り云々のうへに義経
は及びるる帝いと所不興氣めて敦實の父は逆へ提婆の忠
逆もあつて、さうするもの之を縦其肉を醢するといふあつるもの
と兩個討手に向ひあつて親誥殿を切ると其首をとる。二つは
一せむはこそ迷憾まれ渠存命であつても残黨余類懸れ
あつた奈何ある企あるも圖がに一箇の功を支る。この兩個
とも官職と剥取。無官とあつて追放つてその勅命あつたが。

宗貞博雅の功あつたが賞を。竟に勅勘の身とあつて、
得寔や飛鳥をて良うなれ校免死して走物烹らる。韓
信が歎く。今身のうえはつはされて遺恨の流中うへ
く。那里をあつた。はなはたうね。這一面總くは稗史の詞源
あつて玉丸。宗貞博雅何れ。いふ。怎生物語あるそ
次の四の分解を。却説春より秋まで。秋来りてを
も。爰に四歳を経て寛平九年。文月三日。天皇位を敦仁に譲
り。朱雀院に閑居せし。太上皇と号し奉る。即ち太上の御
はうして藤原時平。菅原道實。二人で政を行ひ。江湖上姑
く無為うて。萬民腹鼓の思ひを。あつた。

第二回

檐並兩端婦

思ひまや森物語の名のききとて、
美濃と近江の境、
ふ西側の端婦住り、美濃のうへ蓮の姫とよぶる六十六の
姫ありて年来爰に住り又近江のうへ小森とて、
廿歳むらうる美しき未通ふりて四歳より友
移り住ぬ。この小森の女は、
萬男子やとる業をのぞき、
往來の旅客の擔物に持ちとるを、
強れば常の漢兒の三個四個まで、
最輕うは持ちのうへ、
の外の錢をばて易らふ世を、

斯れば近きうの、
錦木の千束お切る、
の口説きとれど、
好まぬ暇あるごと、
仏事、
蓮の老婆、
傭るにつ、
ア、
これバとて、
て要時、
居しつ、
其身、
近き、
野辺、
とて、

蓮ハ吾家の門とて堅く。うみりける亭を携へ小舟を
小堀居して兩國と一個まで居る。是も最妙。係り
る外方より姉妹裡面は在歟と訛言する。くる来る。は
名うての無頼子とや。諸味の茶藤六といふ馬士。蓮ハ
悋然と。さもいられね。お微笑誰よりと思ひつる。茶藤
六翁あておとせ。小堀居。ハ花を覓や。往く。いさ。く
を翁ハ。いつと。宜機嫌あて。おとす。ハ今鳥も神酒と
さう。や。つと。思。城隍の祭祀。称宜。友の。猿田
彦とやら。ん面の如く。魚色ハ最赤。何を用ひや。あつ。う
神輿と居る。とい。られて。茶藤六。呵々と笑ひ。揚。櫃。ハ。胆

う。あ。う。け。腰間より。拿。は。竹。烟。管。柄。抄。み。似。る。雁。首。り。て。黄
彩。を。汲。あ。け。つ。堂。々。と。ある。埋。火。小。搜。く。あ。つ。て。吹。付。て。烟。痛
は。吹。四。下。と。ま。ま。う。盗。人。の。昼。寝。も。當。が。あ。つ。て。ハ。せ。ど。と。や。吾
儕。は。毎。日。は。あ。く。来。る。も。と。る。當。の。あ。つ。る。と。い。ハ。彼。ハ。我
我。ハ。似。合。ぬ。カ。強。色。情。皓。齒。の。俠。氣。を。無。情。と。ころ。は。惚。ね
いて。日。外。より。焚。火。と。旁。へ。一。向。口。説。と。今。り。て。膿。が。物。ハ。決。れ。て
とも。所謂。蛇。の。生。殺。し。蚯蚓。の。月。鼻。も。付。る。返。答。今。日。ハ。盆。の
十三。日。懇。乞。を。あ。ね。ど。い。と。い。ハ。和。訓。ハ。同。く。女。文。字。を。あ。ね。と
ぬ。の。一。字。の。遠。ハ。是。始。と。も。返。事。を。ま。返。ハ。臺。座。へ。居。つ。る。心。ハ
て。茶。藤。六。如。來。の。来。迎。せ。り。地。獄。天。堂。生。死。の。堺。否。哉。と。ま

ぬそのうち。弥勒の出世を経るとても爰の裡をへ帰るに
 先然思ひく貫くんと。いづれ蓮の姫意の中へ怒れ
 故意笑ひはまきじて茶藤六翁が例の又其性意あるあま
 され意のあはれはけねとや若さうもさへもあつ否まは
 あらね稲舟のうづの客を撰るも左右は男子の浮屠人
 ま実の心産をさる迄の風結るは候不樂てせがみ却
 てある事もやうねやうありやう。帝いつ迄もと幸いせ
 ばその言はるも空僂う。是れは返更け切てとありけ
 がりて地が辺とろりと倒る。枕枕中をさるる。軒車轉
 くまうの。浩る時。東道主の小童。仏は手向る草花を銭

杖の手折て携へ持。吾唐ううく立歸る。秋の空より
 定る。俄頃ふ降来る。村の詮方あくも袖筆うつ道
 と急ぎて漸くと吾家の門辺まで。来つと見れハ軒端
 は佇まのる。舎うさるや有らんそん。空打眺望て憩
 ろのや。詰髪つづみの修り者あり。渠奈何なれば斯とや。より
 仏門は入る。六十六部とるともあふん。教容も醜くは
 お扮を怠生といふ。白き単衣の旅り。旅の日を経うと
 おろく。や。氣さふ。衣とる。と。裾短は着く。吾唐より
 やりある。と。脊負ひ。錫杖。うり。の。杖。あつ。と。う。小童
 これと尻目うけつ。門辺は軋る。石印。ふ。夢を。今。知。濡らさうと



持てり花を虎手は持て右まゝて印をほよとあげ。家の裡
面よりいづれ修好者ハ足て膳を消しぬ。ぬる女児ハ稀
ある怪力ある彼處女が猿力幾許程あらんも計に最羨
と云く知小露なめてお微笑花洛とつらう。辺鄙ハ萬むく
つけく女あるが馬と追ひ田を耕しる。下賤の業はなれく
此の力あるとさ。如羨やとちふ事。うの妻ハ又你が青年く
仏の道は志く廻る。ちふこそ羨望く。なれ幸ひ。今鳥ハ
基と人の心目なれ。こころ。心静は雨を休め。人何のく
とも舗ありともすいせん。とめて。修行者うち。怡びぬ。你ハ
仏乃至帰依。もと思。吾儕が。斯年ハ。やうで。抖擻。く

脚く。さる。み。種。くの。因縁。あり。その。花。も。右。も。一。樹。の。蔭。一。河
の。流れ。も。他。生。の。縁。と。你。基。く。ち。佛。ハ。父母。の。兄弟。の。知。り
る。ら。ね。も。雨。舎。りの。報。い。み。最。懇。は。回。向。せん。ゆ。り。させ。又
と言。け。て。脊。を。屈。つ。潜。り。う。及。と。土。間。一。お。下。し。草。鞋。と。さ
る。ど。と。間。み。小。露。ハ。流。茶。杯。汲。り。て。や。を。彼。修。行。者。う
と。も。る。る。蓮。の。姫。は。うち。對。ひ。嬉。し。よ。さ。と。そ。侯。不。樂。な。て。ぬ
思。ひ。ける。さ。村。る。み。慌。忙。さ。返。う。つ。れ。と。い。ふ。姫。ハ。怡。び。て。地
爐。の。端。み。大。の。字。は。踏。及。ふ。じ。茶。藤。六。を。腮。な。り。て。さ。る。あ
。你。の。留。守。ハ。白。痴。的。の。酒。ハ。醉。く。み。と。こ。み。傍。若。無。人。の
無。理。い。ひ。く。吾。儕。ハ。大。く。困。ら。せ。う。と。い。ふ。小。露。ハ。お。領。さ。あ

ほもろぬ茶藤六が襟髪つゝて猫の児をあのふでぞ。放
下されて茶藤六始と心づき延びて腕をさすりいつの程ふ
帰られぬ最の香る焼酎の酔う来ぬや我もさび竟と
ろくと去てのけろとれ目まへ一服と吹付るや修行者を
熟まがれ小藤ふ對い見れ見られぬ茶藤六の容止醜
らぬ這所修行者の小藤後こころの縁者軟何人そとりの
小藤のや咎れその物咎れとる和郎ありある縁者でま
知己とこころの世話あり敢るや隣の疝氣を以痛と
やういふ事ふ氣なりまじと碎がえさう疾歸り松今
日の妻も志を仏の目みて用も繋る你的お人なるいさあ」と

透許いど懲びよふ不閑くす補助てもやうん死うゝまが
ら豫より。你み首とけ惚ろんで姨を頼んで口説ても返
事づるけれの今日の是れ居促と詰りけつ待たれて眠
ころち一竟よふ熟まぬ麗い前髪度と連立て戻られ
る知情人うと思つていさ嫉しく羨望は腹にこてり。今日
の最早人とな頼や。吾情とてもけ辺の馬士仲間を魅首
の人み知られ諸味の茶藤六疝氣の業で人なとより大
やある畢丸やうろろの言出たる詞の引くやうに
余うけてもけ意気中て貫らるね其うちの友は二も動
うととあゝ氣出さる大踴跳小藤も膝より人魚て言せ

ておけり方圖もなま浪語も程とそあれ帰ねとて其後
まど帰さどふおくづらうとま上りく面と和け今日の佛の
日といひ女どてら腕まきん客人一對して死うこれ
又晩までも来ませよといふと汐茶藤六の吹売もして
腰まき一言いひて二言やま仏くと又してもいふ何中胃
悪く定めて仏といふ奴こそ你が二世と誓うる良人が當り情人
うどれ其仏の戒名とて家廟と目づけりんとするは小露の
慄て推禁めしうするは調戲まねてそあれとまあれ
不口もろぞ晩こそ酒烟て俟ねういぬれま下と獨言門
「あ、何やんね」おち点隙う足あつて枳殻垣うて裏

手「あ、びりね」始終知らずして修行者の小露が雄しき
進止を感激しうる面をみて吾侪の早く父母は後れ孤と
くられ斯諸国廻りふれど漢児と生れるう蠅を扇る
てさ力さるれは足曳の山踏とてる夜の緑の林み脊知り
かめ又小動の破邊とてさる日の白波のよせんこと知れ魂を飛
し胃と冷とてさうらばといふも仏の加護もや幸ありて今日
あでに然るおちたあも遇縁と你的如さ力あらは後や深山
幽谷もさう恐ろしくぬづ由るさ律は暇とて時刻も大く
うつりこれ今日の吾侪も亡父の忌日當れは白他平等入
念入まて面向せんといてまよ小露の心は燈明あけんと燈

盒^{はこ}片^は手^ては持^もて先^{さき}の玄^{けん}案^{あん}内^{ない}は連^れて修^{しゆ}行^{ぎやう}者^{しや}の仏^{ぶつ}間^{かん}のうらふ
入^いふ々^々然^然

傳^{でん}記^き 半^{はん}月^{げつ}夜^や話^わ茶^{ちや}之^の臺^{だい}耳^{みみ} 種^{しゆ}相^{さう}友^{ゆう}

ト五七五ア

